

【1 A：負けじと舌を突き出す】

下級のサキュバスごときにキスで負けるわけにはいかない。レイヴンは舌を突き出すと、舌同士の粘膜が合わさるにゆるりとした感触がした。キスの恍惚感が数倍に膨れ上がり、頭の中がかすんで現実感が薄れていくような感じがした。

（レロレロ……、積極的ですね）

キスをしながらもサキュバスは頭の中に直接語りかけてきた。別に特別なことではない。キスを得意とする淫魔の多くが持っている普通の能力だ。

（あなたの口……、犯してあげますね）

そう言ってサキュバスはレイヴンの口内に舌を入れてきた。予想しやすい動きを迎えうってやろうと思ったが、その舌は思っていたよりも長く、頬の裏や喉などを舐めまわされ、口内を蹂躪されることになってしまった。

（おいし……）

長い舌のうねりが激しさを増すたびに、レイヴンは自分の意志を舐め溶かされていくような感覚を覚えた。多少のグロテスクさ感じさせるネチっこい舌の粘膜に危機感を覚え、顔を引き離そうとするが、意志がぼやけてしまい動けなくなってしまう。

（ふふ、どうですか？ 今度はあなたが舌を入れてください）

サキュバスは舌を引っ込めると、今度はレイヴンの舌を吸い込み自らの口内に導いてきた。熱っぽい官能的な器官に自らの舌をしゃぶられていると恋慕の感情がわきあがってきた。

（好きになっちゃいましたか……？）

サキュバスは恋人にするように優しく抱きしめながら、脳内への語りかけを囁くような声にしてきた。レイヴンは口づけに夢の中に漂うような感じになってしまい、そのお口をぼんやりと吸い続け堪能させられてしまった。舌を伸ばして恋仲の口内を舐めまわしていくと唾液が舌にからんでいった。淫魔の唾液は精神を狂わせる淫毒だということを知っていても、止めることができなかった。

（くすっ、唾液交換ですか？）

サキュバスの方から吸いついて口内の唾液を舐めとられていくと、精神の力が奪われていくような感じがした。レイヴンの脳裏に稀少かつ強力なスキルである「マインド・ドレイン」という言葉が思い浮かんだが抵抗できなかった。長い舌がレイヴンの口内を這うたびにドキドキと胸が高鳴って心が奪われていった。

(攻守交代ですよ。さ、攻めてくださいね)

レイヴンの舌が吸い込まれたが、あまりの甘美さに陶然として、動くことができなくなってしまった。

(舌、動かさないんですか……？)

舌先と舌先がレロレロ、ニユルニユルと合わされると、レイヴンはもう気がおかしくなってしまう、ペニスを相手のお腹に押しつけて密着を強めた。

(おちんちん、熱くなってますね……♪)

恋人がお互いの身体に甘えるように優しく抱きしめ合っていた。レイヴンは無意識にサキュバスのおっぱいとお尻を愛撫して堪能し、不利な状況にも関わらず互いの興奮を強めていってしまう。

(ふふ、そろそろ身体も愛撫して欲しいみたいです)

サキュバスがレイヴンの胸板に手を伸ばし優しく愛撫し始めた。それだけでもうっとうとする快感が広がっていったが、指先が乳首に触れるとペニスが一気に気持ちよくなってヒクヒクと疼いてきた。ペニスの先端からはすでにカウパーが分泌されていて、サキュバスのお腹に塗りつけると頭が真っ白になった。

(お待ちかねのシコシコをしてあげますね……♪)

サキュバスがペニスを手でしごいて刺激を与えると、レイヴンは強い快楽に陶酔してしまい、もっとキスにのめり込んでいってしまった。

熱い吐息混じりの口づけを交わしながらペニスをいじられていると、おちんちんから発生する快楽に身も心もゆだねて甘えきってしまった。

(あはっ、もうできあがっちゃってるみたいですねえ)

サキュバスが手コキを激しくすると、おちんちんはあまりいじられていないにも関わらず強い快感が生じてしまった。

心身をコントロールされたレイヴンにそれを耐える術があるはずもなく、サキュバスの腹部に大量に精液を吐き出してしまった。

(出しちゃいましたね……♪)

精液を出している最中にも手は激しくシェイクされ続け、射精は引きのばされていった。白濁液がサキュバスの下腹部を白く染め、アソコの方へと流れ入っていった。

(もう一回、出しちゃいましょうね……。ふふ)

一切の休憩を挟まずに手でペニスがしごかれ続けた。サキュバスが目の前で浮かべる笑みはとても蠱惑的で、このまま何度も搾りとられたいという欲望を強く煽ってきた。

幸せそうに体を震わせながら射精するレイヴンにもう抵抗の意思はなかった。そのままお腹に何度も射精しながら彼の意識は途絶えた……。

《ゲームオーバー！》